



UFOが くれた夏

A Summer with UFO

川口雅幸

Masayuki Kawaguchi

もしもこの世に 歌というものがなかったら
伝えられない思いが たくさんあるかもしれない
伝えきれない思いが いっぱいあるかもしれない
もしもこの世に 歌というものがなかったら
大切なことも 大切なころも
忘れ去られてしまうかもしれない

この先 大人になつてから
いつかどこかで その歌を聴いた時
オレは 何を思うんだろう
みんなは 何を思い出すんだろう……

	第一章	宇宙から来た恋のキューピッド	7
	第二章	イケメン魔術師カイドー	65
	第三章	謎のメッセージボトル	117
	第四章	秘密結社KSG団	171
	第五章	コバルトブルーの誓い	225
	第六章	砂に描いたフォーエバー	281
	第七章	旅立ちの日に	343
エピソード			425

第一章

宇宙から来た恋のキューピッド

受話器をとるや否や、

「今ならまだ見えるよ！」

いつになく興奮したような甲高い声が、心地よく耳に飛び込んできた。

「早く早く、外に出てみて！」

またあのUFOが現れたらしい。

慌てて電話を切り、急いで玄関から飛び出すと、

「えへ、ひっかかった」

そこにはあいつが、いたずらっぽく笑い浮かべて立っていた。

「ごめんね、突然」

持っていたケータイをパタッと閉じ、ひと呼吸おいてから、

「大事な話があるの。一緒に来て」

急に真顔でそう言い放つなり、あいつは長い髪をひるがえした。腹の奥底のほうで、何かが、大きく弾むのを感じた。

それっきり何も言葉を交わさずに、オレたちは海に向かって歩いた。

ケータイのストラップについている小さな鈴が、あいつの足音と一緒に、リリ、リリ……と、短く、鳴り続けていた。

夕暮れ前の渚は他に人影もなく、少し涼しくなった風が、ひたすら静かに潮の香りを漂わせていて。

水面にちりばめられたダイヤモンドのきらめきも、黄昏ゆく夏空と共に移ろいながら、やわらかな揺らめきへと趣を変えてゆく。

「ねえ、遼哉くん」

ふわりと舞った、艶やかな髪。

さらさらと音がしそうなその栗色のストレートを耳にかけたまま、俯いた横顔がふとつぶやく。

「ずっと言えなかったんだけど、私ね、前から遼哉くんのこと……」

急に潮騒よりも大きくざわめき出した胸の奥に、ごくりと唾が送り込まれる。

浅瀬を見つめる長いまつ毛が、眩しそうに何度か瞬いたかと思うと、

「ねえ」

ふっと振り向いた瞳が、大人っぽいその切れ長の目が、真っ直ぐにオレを映し出した。

「キスして」

ズワン…… シュワー

ふいに打ち寄せた大波の白い縁が、甘いメロディーみたいに緩やかな起伏を描き、足元の色をしっかりと変えてゆく。

光と影のほかに何も無い、すべてがオレンジ色に染められた二人だけの世界。

風が止むと、一瞬、曲と曲の合間のような、透き通った静寂に包まれた。

「は、晴香……」

その瞳を見つめ返せば、あいつの艶やかなくちびるも小さく動く。

「シヨウちゃん……」

……ええ？

「行かないでシヨウちゃん、お願いよ」

ええええ！

「私をひとりしないでよう」

そこには、今にも泣き出しそうな見知らぬ顔が――

……イビイビイビイビイビイビイビイビイビイ!

防犯ブザーばりにけたたましい音で、はっと目が覚める。

「もう、誰なんだよあれ」

鳴り響くそれに手を伸ばし、大きなあくびを一つ。

「つたく、いいところだったのに」

最近よく見る、あいつの夢。

だけどそこに突如、あの誰とも分らない髪の毛の短い女の人が、いつも決まって現れる。

まあ、夢つてのは大抵が意味不明だからな。

奇想天外なストーリー展開で、オチもなくうやむやのまま終わってしまうのがほとんどだ。

「それにしても、今日のはまた一段とリアルで刺激的だったなあ」

途中までは、まさに理想どおりの内容だった。

「でもあいつ、いきなりアレだもんなあ。オレにだって心の準備つてもんが」

ニヤニヤと、思い返しながら微睡んでいたら、

「リョウちゃん、今日も早く出るんでしょー。いいかげん起きなさいよー」

ドアを容赦なく貫通してくるお母さんのイライラ声で、完全に夢が破られた。

「いつてきまーす」

薄暗い団地内に、今日もリズムミカルな靴音を響かせてやる。

踊り場から踊り場へ、短いコンクリート階段の連続を三段抜きジャンプを交えながら一気に

駆け下りると、外は眩しい陽の光に満ちていた。

何だかすごく清々しい朝だ。

まだ涼しさの残る六月の澄んだ空気を思いっきり吸い込んだら、意味もなく何かいいことがあ

りそうな気がしてきて。

もう一人の自分に背中を押されてるかのごとく、軽やかなテンポで弾むランドセルに急かされ、

オレはいつものように海岸へと続く坂道を早足で下った――

この町に来てから、もう三ヶ月になる。

本当は、転校する時期を、せめて中学に上がる時に合わせてほしかったんだけど、お父さんも

会社の都合には逆らえないみたいでさ。

って言うか、そういう希望を口に出せる状況じゃなかったみたいで。まあ、そんな感じでシブ

シブ引っ越してきたわけなんだけど。

ここに来たばかりの頃はえらく殺風景だと思っていた団地周辺の景色も、季節の移りかわり

と共に、気が付けば緑色の割合がぐんと増え、随分とにぎやかになった。

オレはと言えば、いろんなことに慣れてきたせいもあってか、生活にも少し余裕が感じられるようになったし。

やっぱり暖かくなると身も心も軽くなってくるのかな。最近はもう、雨の日以外は朝から半袖一枚で十分だ。

考えてみれば、あと一ヶ月もすれば夏休みだもんな。これから楽しい季節がやってくる……そう思うだけで何だかワクワクしてきちゃう。

それにしても、これだけポジティブな考え方ができるようになったのは、あいつと知り合えたからに他ならないだろう。

出逢いは、新学期早々の思いがけない席替えだった。

偶然にも隣の席になった時は、思わず心の中で「キターッ！」って叫んじゃまったのを覚えてる。実は、転校初日に皆の前で自己紹介させられた時、既に気付いてたんだ。緊張して焦点の定まってるオレの目を、ハッと見開かせてしまうほどに際立ったその存在に。

頬杖をついたまま長い髪をかき上げ、こちらをジッと見ていた大人っぽい子。雰囲気わりには、並ぶと意外に背が小さい、いろんな意味でアンバランスな女の子。

そう。それが『あいつ』ことクラスのアイドル、『染井晴香。十一歳★』だ。

ちなみに、『』と最後の『★』は発音せず、フルネームと年齢とをワンフレーズで「一気に読

んでネ！」だそう。よく分かんないけど。

ええと、身長百四十一センチメートル、体重三十二キログラム、スリーサイズは上から八十七、五十五、八十三のすっごい超セクシーダイナマイトになるよ・て・い、ハート。山羊座のAB型で、特技は黒目リレーと八時間耐久カラオケ♪ 趣味はお茶とお花さまざまわよオホホホ……ああ、これ全部本人から渡されたプロフィールに書かれている情報ね。

晴香は、この通り見かけによらず（っていうかオレの勝手なイメージだったのかもしれないけど）かなりオチャラケてるものの、その分接しやすくて気さくな子で。

消しゴムを忘れて困ってれば、わざわざ自分のを半分に分けて「これ、あげる」なんて、さりげなくやさしかったり、「その代わり、今度もしも私がコンパス忘れたら半分こだからね〜」なんてアホな冗談も言ったりする、すごく明るい子だった。

そんな感じだから、転校早々ひとり浮いてる間もなく、自分の居場所みたいなのがそこにできた気がして。

小さい頃からわりと人見知りする性格だったこのオレが、こんなに短期間で、しかもあんなクラスに溶け込むことができたのも、居心地のいい『晴香ワールド』がバックグラウンドにあったからこそだろう。

だから、日を追うごとにあいつがオレの中でどんどん特別な存在になっていくのは、当然の流れだったのかもしれない。

いつからか夢にまで見るようになってきた。っていうか、夢なんかに出てくるから余計に気になっちゃったりして。参るよな、マジで。

「あ、おはようございます」

「はい、おはようさん。今日も暑くなりそうだねえ。気を付けていくんだよー」

坂を下りきったところで、毎朝すれ違う犬の散歩おばさんと挨拶を交わす。そして、いつものように信号のない横断歩道をダッシュで渡れば、そこはもう見渡す限りのグラデーショナルブルー。空と海とが織りなす広角のパノラマが、今日も変わらず両手を広げて待ち構えている。

穏やかな潮騒に耳をくすぐられ、誘われるようにそちらへ足を踏み入れれば、靴底をやさしく包み込む白い砂の感触。歩いたびに「早く裸足になっちゃいなよ」と囁いているかのよう。

前の学校じゃ考えられないほど贅沢な通学路だ。いや、実際には通学路と並行しているだけで、これも立派な寄り道になっちゃうのか。

「さてと、何かいいもの落ちてないかなあ」

白砂の渚が、緩やかなカーブを描きながら延々と続く、道なき道。

毎朝のことながら胸を躍らせつつ、波打ち際をゆっくりと歩き出す。

ちよつと早めに家を出て、今日も登校しながらのビーチコーミング※。オレのセレブな日課だ。

(※ビーチコーミング＝海岸にある漂着物を集める遊び)

なんて、毎日欠かさず寄り道する本当の理由は、また別にあつたりするんだけど……

「遼哉くーん」

「来た」

後ろから聞き慣れた元気な声が追いかけてくると、目の前の景色がより鮮明に、パーツと開けた。

分かっているのに、毎朝のことなのに、やっぱり嬉しくなってしまう。

「おはよー!」

振り返る間もなく、隣にいつもの笑顔が走り込んできたかと思うと、

「ねえねえ知ってる!?」

次の瞬間には長い髪をクイックターンでひるがえし、いきなり目の前に現れる『染井晴香』

十一歳★」。

「昨日の夜、またあの謎の光が出現したんだって!!」

らんと輝く大きな瞳が、行く手を阻むように立ちはだかる。

毎度のことだけど、何でこの子はこうやって真正面に構えて他人の目をジッと見るんだろう。って、あんな夢を見ちゃった今日は特にそれ、ちよつと、タイミン的に困るんだけど。

「遼哉くんは見た見た?」

「あ、いや、オレは、見てないけど」

こっちはそれどころじゃないんだってば。

ああ、やばい、まともに目を合わせられないよ。

「ねえ、何か顔赤いよ？ どうしたの？」

うわ、聞くな、頼むから聞かないでくれ。

っていうか、その殺人的美顔を近づけてくるのは反則だぞ。もはや凶器だ、犯罪だ。

しかも今日に限って、やけに口元をチラチラ見てくるような気がするな。余計に意識しちゃうじゃんか。

しかし晴香は、そんなドキドキMAXのオレをよそに、今度は鼻で深呼吸をするように大きく息を吸い込むと、すーっと目を閉じ、

「んー……」

って、どういうつもりだ。

まさか、これって、このシチュエーションって――

「は、晴香……」

「……ブルーベリー！」

突然パッと目を見開いたニコニコ顔が、いきなり手鏡を突き出してくる。

何事かと、そこに映り込んだマヌケ面をよく見れば、

「げっ」

何と口の周りに、赤紫のカピカピがくっついてるではないか。

すると晴香は、人差し指を顎に当てるモーションで、
「ラズベリーと迷ったんだけど、この香りは間違いないね。今朝のトーストはブルーベリージャム！」

などと嬉しそうに名推理を展開し、勝ち誇ったような笑みを浮かべてる。

と思っただけの瞬間

「ねえ」

急に真顔になった『凶器』が、また真正面からジッと見つめてきた。

「さっき、キスしようとしたでしょ」

「キ、キキ、キキス!? ま、まさか、そんなこと、オレ」

落ち着け、こんなに慌てちゃったら凶星みたいじゃんか。凶星だけど。

でも、そういうエロいやつだと思われたくないから、頑なに否定してやった。

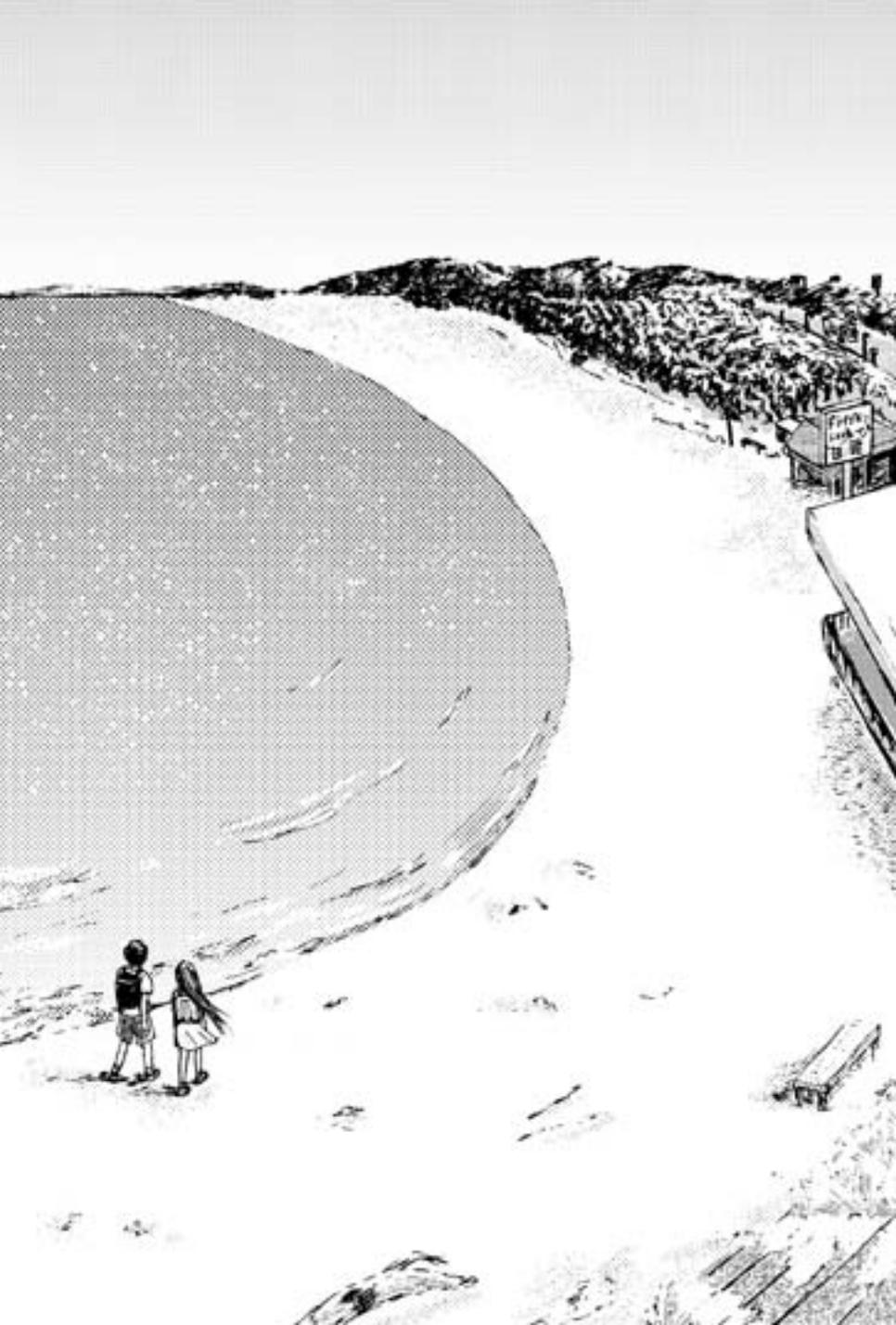
こんなことで嫌われたくないから、身の潔白を必死に訴えたんだ。

そしたら、今度は寂しそうに俯きながら、

「なーんだ。ちよっと期待してたのにな」

って、マジデスカッ!?

もう、どうしていいのかわかんなくて超シンドロモド口になってたら、瞬く間にいたずらっぽく変化した小悪魔スマイルが、「うっそーん」へへーと舌を出した。



「もお、ちゃんと顔洗^あつてきなよー。お子ちゃまなんだからあー！」

きやはははと笑いながら、さっさと駆^かけ出してやがる。
完全にしてやられた。妙な夢^みなんか見るからだ。

だいたい思わせぶりなんだよ、いつも。

「じゃあねー！ 先^まに行^いつてるねー！」

夏の気配^{けい}を帯^おびた青空^{あおぞら}に、まるで黄色い花のような声を咲^さかせながら、赤いランドセルが駆^かけてゆく。

今日^けもまた、あいつのいる鮮^あやかな一日^{いちにち}が始^はまったのだ。

「やれやれ」

何^{なに}だか振り回^まされてるような気^きもするけど。

こういうドキドキが、『学校砂漠^{がっこうさばく}』に潤^{うる}いを与^{あた}えてくれるのかもしれないしな。

「毎日楽しいぜ、まったく」

オレは口の周^{まわり}りをゴシゴシやると、結局今日^けもビーチコーミングそっちのけで、学校^{がっこう}へと足を速^{すみ}めた。

教室につくと、そこから中謎の光の話題で持ちきりだった。

「ガチでやばいって。これで今月に入って三回もだぜ？」

「ああ、かなりやばい兆候だよな。Xデーは近いとみた」

こつちで男子が、真剣な顔で話しているかと思えば、

「昨夜のつて、海岸付近にまで接近してきたらしいじゃん！」

「そうなの〜!?」「やー、こわ〜い！」

あつちでは女子たちが、泣きそうな顔して騒いでる。

最近、校内でもつばら噂になってる、『UFO多発襲来事件』。

謎の光に関しては、以前から白波海岸の怪奇現象として有名だったらしいんだけど、これだけ

頻繁に目撃されることは未だかつてなかったんだって。

にしても今朝は一段と騒がしいな、と思っていると、

「だからよ、絶対ジョーカーは怪しいぜ」

「そうそう」「絶対怪しいー！」

ひと際騒々しい声たちが耳に飛び込んできた。

「もしかしてあの爺さん、宇宙人とコンテストしてるんじゃないか!？」

「それを言うなら、コンタクトな」

「そう言えばうちの兄ちゃんがさ、新型インフルエンザって実はUFOが関係してるらしいぜって言ってた」

「知ってる知ってる！ 宇宙人陰モウ説！」

「『陰謀説』じゃ、このバカチンがあー！」

窓際の後ろのほうでやたらと盛り上がっているこの連中は、谷口大那を中心とする『大那グループ』だ。

もちろん、本人たちがそう名乗っているわけじゃない。この六年二組の、いわゆる問題児たちにつけられた、先生たちの間での通称だ。

このクラスは、五年生の時にもの凄く荒れていたって聞いた。しまいには担任の先生がノイローゼで学校をやめてしまうほどひどかったみたいなんだけど、その核になっていたのが、成瀬木ノ内、内海、塚田、そしてリーダーである谷口大那の五人組だったらしい。

どうやら大那の反抗的態度がその発端で、次第に周りの子たちも感化され、事態はどんどんエスカレートしていったということだった。

ロッカーにランドセルを押し込められていると、
「おい、吉野」

その大那が、ひとつだけ並びからはみ出た一番後ろの席にどっかりと腰かけたまま、「団地からは見えたか？」と話しかけてきた。

「いや、オレは……」

返事をするかしないかのうちに、やつのごつい顔がニヤリと笑う。

「お前、昨夜のはマジバだったんだぜー」

ワックスで立たせたツンツンヘアをしきりに摘みながら、得意げに語りはじめる。

大那は、どう見ても小学生には見えない。背が高いだけじゃなく、全体のパーツ一つ一つが『規格外』のサイズを誇っている。

ジェスチャーするたびに行き交う手は、明らかにオレの一・五倍くらいはありそうだし、タンクトップから露出した肩は威嚇するかのよう張り出していて、まるで中学生だ。それも、夜、コンビニの前に集まってそうな怖い中学生。

実際、見た目どおり相当な乱暴者らしく、キレて見境なく金魚鉢をひっくり返したという『金魚爆弾事件』は、もはや伝説と化している有名な話で。

正直、できればあんまり関わり合いたくないんだけど、幸か不幸か時々こんなふう普通に話を振ってくれたりする。ありがたいようなありがたいような微妙な気分だ。

それでついつい目を逸らしがちになるもんだから、「おい吉野、聞いてんのか。オラッ」って、結局また絡まれちゃったよ。

「はい、みんなー、席についてー」

そこへタイミングよく、極細の甲高い声と共に岩清水先生が入ってきた。

どやどやと、それぞれが自分の席を指して移動を開始する中、案の定、窓際の後ろの大那たちだけはお構いなしだ。

「ほら、成瀬くんたちもー」

さっそく注意されると、

「せんせー」

大那がすかさず手を挙げる。

「今、すつげえ盛り上がりつつあるから、もうちょっと待っててください」

始まったよ、今日も。

「でも、もう時間だから……」

「俺ら、昨日あのUFO見たんですよ。だからめっちゃテンション高くて」

なあ！ と同意を求める大声が、細い声を完全に打ち消す。

こうなると、周りに立ってる四人も黙っているわけがない。

「いいじゃん、アヤノちゃん。朝の会の時くらい」

アシンメトリーに垂らした前髪をクールに払いつつ、ナンバー2の成瀬が乗れば、

「そうそう!」「俺たち、地球がどうなるかって真面目な話してるんだから」

内海と木ノ内の、割れた変声期ボイスによるコンビネーション攻撃が続く。

そうしてる間にも、塚田がまた大那に何やら突っ込まれて大笑いしてる。

「んー」

先生は困った顔をして、メガネに手をやりながら、「仕方ないわね」と苦笑いを浮かべた。

「じゃあ、今朝は特別よ」

途端に教室全体がにぎやかさを取り戻し、あちこちで話の花が咲き乱れる。

堂々と髪を梳かしはじめる女子がいるかと思えば、我関せずで一人もくもくと読書を続けるや

つもいて、皆一気に自習モード全開って感じ。

いつものことだ。いや、いつもより悪いか。今朝は朝の挨拶すら省略だもんな。

——「六年二組は、新任の岩清水綾乃先生という、穏やかでやさしい女の先生が担任です」

挨拶をしいった時、校長先生からそう言われて、安心しきっていたあの頃。

確かにそのとおりだったけど、クラスそのものが穏やかでないってことは、まったく予想もしていなかった。ちよつと騙された気分だった。

だって、こんな無法地帯、前の学校じゃ考えられないよ。

新学期早々の席替えにしても、自分が一番前の席なのが気に入らないからって、大那が言い出したのが発端だ。

しかも、男女の並びを無視して勝手に勝手に窓際に移るといふ荒技が許されるなんて、信じられなかった。

挙句の果てには、「するくなくい? アタシも端っこがいい」なんて便乗する女子も出てくるしさ。もうむちゃくちゃ。

まあ、席替え自体はラッキーだったし、オレとしてはクラスがどうであろうと大した問題じゃない。

いや、ぶっちゃけ別にどうでもいいんだ。一年間大人しくやり過ごせばすむことだし。どうせ中学が上がれば、みんなバラバラになるんだから。

結局その日は一日中、UFO騒ぎに終始した。

この手の話は大好きなんだけど、オレ自身はそういう不思議体験をしたことが一度もない。だから、皆の注目的になってる大那たちのことが、ちよつぴり羨ましくもあった。

放課後の砂浜は、照りつける太陽を跳ね返し、まるで真夏のような眩しさを放っていた。「しっかし、マジ暑いなあ」

おとなしく松林に囲まれた日陰の遊歩道を行けば、涼しいのは分かっている。だけど、せっかく海の傍にいらんだもん、もったいない気がする。

なんたつて海辺は宝の山だ。文字通り、宝物がゴロゴロ転がっているんだから。

中でも、ガラスの破片が波にもまれ、長い年月をかけてできるシーグラスは、世界中にコレクターがいるくらいメジャーなお宝で。

何を隠そう、オレも小さい頃からその『海の宝石』に魅せられてきた一人なのだ。

Tシャツの裾をバフバフやりながら、砂浜通学路の帰り道を今日もひとり、ビーチコーミングに明け暮れる。

とは言え、はたから見れば、『入り江を俯き加減でトボトボ歩く寂しそうな少年』ってところるか。探すと意外に見つからないもんなんだよな、シーグラスって。

「はあゝあ」

人気がない穏やかな海辺は、頭の中を寄り道させるのにも最適な場所かもしれない。

そう。気が付けばいつも、あいつの笑顔を思い浮かべては、ぼーっと歩いている。

本当は帰り道も一緒になれたらって思うんだけど、そうもいかない。

あいつときたら、帰りの会が終わった瞬間に駆け出して、いつもソツコウでいなくなっちゃう。

とにかく神懸りの早いんだから。あいつより先に教室を出た子を、オレはまだ見たことがない。

それより何より、一緒に帰ろうだなんて、オレがあいつにそんなこと言えるわけがないもんな。「晴香、かあ……」

あいつはいつも元気で明るくて、おまけに芸能人レベルでかわいいときてる。それでいて皆にやさしいもんだから、女子からも男子からも人気があつて。

つまり、あれはオレだけに向けられたかわいさではないし、オレだけが特別扱いされているわけでもない。

何となくフィーリングが合うような気がするの、たぶん、オレたちの共通点のせいだろう。

晴香も去年ここへ転校してきたらしいから、よそ者同士ということで、多少は身近に感じてくれているんじゃないかな。

まあ、どっちにしても、オレなんかとは到底つり合わない子であることに変わりはない。

それに、オレには分かっているから。あいつには、他に誰か好きな人がいるんだってことが。

そしてそれは、恐らく他の誰も知らないであろう、誰にも秘密の相手だということも……

「ぬおっ！」

突然、ガツンと何かにつまずいた。

どうにかコケずにはすんだものの、つま先がジンジン痺れている。

「いつてえな、もう」

睨みつけるように振り返れば、すぐ後ろに尖った石のようなものがあるではないか。

「なんだこれ」

拾い上げてみると、手の平大の赤黒い三角形で、別段、重くもない。

ましてや地中深く突き刺さっていたわけでもないのに、あの強い衝撃は一体何だったというのか。

不思議に思いながら、角度を変えてあちこち見てみると、ゴツゴツ尖った部分とは別に、断面らしきザラザラした面もある。

「どうやら瓦とか、そういう何か陶器類のカケラのようなだ。」

「いずれにせよ、こんな尖ったガレキは危険だし、どう見ても砂浜には似つかわしくない。」

「オレは少し下がってから助走をつけると、つま先の痛みに対する多少の恨みも込め、コイツを遥か海の彼方に葬るべく、思いつき腕を振りかぶった——」

その時。

——レサマワレキオ レオナルトウ……

不意に、耳元で誰かに何か囁かれた気がした。

とつさに手を止めて辺りを見回したが、誰もいない。

不審に思いつつも気のせいだろうと自分に言い聞かせ、もう一度投げようとしたのだが、

「え、あれ……」

今度は別の異変に気が付いた。

親指と中指で挟んでいた、あのゴツゴツ感。添えた人差し指にあった、断面のザラザラ感。

それら右手にあるはずの感触が、急激に薄れていくような、妙な感覚に襲われたのだ。

慌てて手を見てみれば、指は掴んだままの形を保っているのに、何と肝心のカケラそのものがなくなっているではないか。

「ど、どうなってんだ」

落としたんだろうか。いや、そんなはずはない。今の今までこの手にちゃんと持っていたのに。

まさか、消えた!? そんなバカな。

「そう言えば、その前に妙な声が聞こえたような気がしたけど、それも何か関係が——」

「うわ、やべ」

「ハッと我に返り、思わず舌打ちすると同時に目を逸らす。」

「もう、最悪」

海の家に向こうに、見てはならないものを見てしまった。

骨組みが半分剥き出しになったバルコニーの隅に立つ、不気味な影。

「ジョーカーだ。どうしよう、思いつき目が合っちゃったかも。」

「白々しく、鳴りもしない口笛なんか吹きながら、とつと歩き出す。」



うかつだった。いつもは意識して足早に通り過ぎる地点なのに。

今日に限って、ふと立ち止まった位置が、よりもよってあのドライブインの真裏だったなんて。

海岸沿いの道路に面した、古びた建物。ところどころ壁が崩れ落ち、海側から見る限り、ほとんど廃墟と言ってもいいくらいにボロい。

道路側は対照的で、白い板張りの壁はまだ新しい感じだし、イルカやヤシの木をかたどったステンドグラス風の窓たちはブルー系で統一され、むしろ爽やかな雰囲気さえ醸し出している。だけど、いつもカーテンを閉め切っているばかりか、駐車場の端から端までロープが張られていて、お店を開ける気配すら感じられない。

道路脇の鉄柱には、【ドライブイン ラストウェーブ白波←】という大きな電光看板が立っているものの、その下部分は三角形に割れ落ちたままだし。

要するに潰れちゃったみたいなんだけど、このへんの子供たちの間で怪談のように語り継がれているのが、そこに住んでいる謎の老人の話だ。

何で『ジョーカー』なのかは知らないけど、皆がわざわざそういうあだ名をつけて怖がるのは分かる気がする。

伸びるだけ伸びたグレーの髪を後ろで縛り、いつ見かけても、やたらでかいサングラスをしていて。おまけに、痩せた浅黒いその顔には、ヤバそうな傷跡まであるらしい。

そう。どう見ても、普通の爺さんじゃないのだ。

今日は大那たちに『宇宙人の仲間』にされていたけど、この前までは確か『国際的な殺し屋の一味』で、目下組織からの指令を待ちながら地下に潜伏中、つてことになっていた。

そんなわけないだろうと思いつつ、あの威圧的な風貌を目にしてからは、妙に納得させられてしまつて。

とにかく正体不明で、少なからず怪しい人物であることは間違いない。

「もう大丈夫かな」

目をこするふりをしてチラッと後ろを見やると、既にバルコニーにもうその姿はなく、ホッと胸をなで下ろす。

だけど、穏やかな海も今はその静けさが逆に不気味な感じがして、オレは逃げるように急ぎ足で家路についた。

サザザン…… シャー

寄せては返す、波の音。

静かな海の営みが、沈黙する二人の空白を埋めるように、ただひたすらりピートしている。

「あのね、私……」

思いついたように口を開いた、あいつの横顔。

長い髪が、風にふわりと舞う。

「ずっと言えなかったんだけど、私ね、本当は」

ズワン…… シャー

潮騒に掻き消された、小さな声。

聞き返すと、

「行かないで、シヨウちゃん」

そこには、あの見知らぬ女の人が、いつもの悲しげな顔でオレを――

「!」

突然、視界が赤黒い煙幕のようなものに遮られた。

そのもやもやの中で、何か動物の目らしきものが、まるで月明かりをまとったナイフのように青白く、鋭く、ギラリと光を放っている。

面食らっている、今度はその向こうから、

「――おい、小僧」

いきなり、ドスの利いた唖れ声が話しかけてきた。

「――そんなにあの子のことが好きか
だ、誰？」

「――まあ、そんなにびびることはねえ。俺様はキューピッドってえやつだからな」

キューピット!?

「――トじゃねえ、ドだ。何だあ、まさかキューピッドを知らねえってのか。分かりやすく言っちゃったのに」

いや、知ってるけど、その声だと何か……

「――ははーん、赤ん坊みてえなかわいらしい声じゃねえから、疑ってるわけだな。これだからシロウトは困るんだ。いいか、まずキューピッドってえのは今風の呼び方だ。元々はクピードと言ってる、古代ローマじゃあ髭を生やした凛々しい男の姿だったわけよ。な、だから最後の発音もドが正しい。分かったか小僧」

じゃあ、そのクピードーさん本人なの？

「——だから、そうは言っておええだろう。ものたとえだ。よく言うだろうが、恋のキューピッドってよ」

「はあ、おじさんが、恋の……何かいまいちピンとこないな。」

「——まあいい、そのうち分かる。要するに俺様は不吉なものなんかじゃあねえってことよ。どちらかというとその逆だ。だから二度と俺様を忌み嫌うようなまねはするんじゃないぞ」

嫌うも何も、別にオレは……

「——それから、オジサンはやめる。俺様は、レキオ・レオナルトウ。由緒正しい名があるんだからよ」

レオナルド？

「——だから、ドじゃねえ。トウだ」

ややこしいなあ、もう。どっちだっていいじゃんか。

「——何がいいものか。よおく覚えておけ小僧。言葉つてえのは大事だ。たった一文字違うだけでまったく意味が違ったりするもんだからな。いいか、俺様はレキオ・レオナルトウ。ドじゃなくて、トウだ」

はいはい分かったよ。レキオ・レオナルトウね。ドじゃなくて、トウね。

まったく、変なところにこだわるんだから。

って、待てよ。その名前、どっかで聞いたことがあるような……

「……？」

目が覚める。

「夢か」

カーテンが眩しいほどに光を帯びて、布地の質感までくつきりと浮かび上がらせている。今日もいい天気みたいだ。

壁の時計に目をやると、ちょうど目覚ましが鳴る五分前だった。

それにしても変な夢だったな。わけ分かんない。さすが夢だ。

そんなことより、今日も楽しい朝の日課がオレを待ってるんだ。早起き早起き、っと。

「ん？」

鳴り出す前にスイッチを切ろうかと伸ばした手が、何か別の感触をとらえる。

「何だろう」

起き上がり、枕元のそれを目にした瞬間、

「！」

オレは思わず身構えた。

「こ、これ、何で、ここに……」

洗いざらしの、真っ白なシーツの上。

そこには、あの時手の中から跡形もなく消えたはずの、あのガレキが、その赤黒い姿を静かに、横たえていた。



3

鉛筆を走らせる小刻みな音が、そこら中で響いている。

鼻水をすすする音や咳払い以外には、話し声も聞こえてこない。

先生は先生で、日当たりのいい窓際のデスクに腰を下ろし、肘を突いた手で顔をあおぎながらひと息ついている。

週に一度ある『漢チャレ（漢字チャレンジ）』の時間。

昨日、『漢ド（漢字ドリル）』をひと通り復習していたから、今回はマジで余裕だった。

とは言え、いつもなら余った時間を、間違いがないか見直すのに費やすんだけど、今日はどうもそれどころじゃなくて。

暇さえあれば、今朝のことを思い出しては考え込んでしまう。そう。あのガレキのことをだ。いつたい、どうして枕元にあっただらう……

少しして、四時間目の終わりを告げるチャイムが鳴った。

「はい、やめー。後ろの人、集めてきてくださいー」

甲高い声を合図に、教室内にガヤガヤが戻ってくる、

「遼哉くん、どうだった？」

晴香が、わざわざクルッと膝をこちらに向けてから、神妙に顔をのぞき込んできた。

「おお、たぶんバッチリ」

親指を立てると、「よかったあ」って嬉しそうに笑いながら、「じゃあ、たぶん私もバッチリだよ！」と、Vサインをする。

「じゃあって何だよ、じゃあって」

「だって、ボーっとしてるから、どうしたのかなあって思ってたら、見えちゃったんだもーん」って、カンニングかよ！

「えへへ、わざとじゃないから大丈夫！」

まったく、何が大丈夫なんだか。

「でも、今日の遼哉くんやっぱり変だよ。朝からすごい難しい顔して、何か考え事でもしてるの？」

「別に、大したことじゃないよ」

と言いながらも、気にしてくれていたのかと思うと無性に嬉しくて。

「いや、実はちょっと不思議なことがあってさ」

「えー、なになに、どんなこと？」

本当は話すつもりなんかなかったんだ。内容自体がかなり地味だから、UFOみたいに盛り上げられるネタではないと思ってる。

でも乗ってきたから、オレもその気になって、「今朝、起きた時にさ、枕元に」まで言いかけたんだけど、

「あ、ごめん、ちょっと待って」

晴香は急に席を立つと、教室を飛び出して行ってしまった。

またかよ……心の中でそうつぶやいたら、さっきまでの嬉しさが泡のように、一瞬で消えてなくなった。

たぶん、トイレか階段の踊り場に行ったんだろう。いつものあれだ。オレには分かっている。

長いため息をつきながら、ほつぺたを机に押し付けると、そのまま顔ごと沈んでしまいそうな気がした。

机から伝わってくる教室のざわめきに身をゆだね、しばらくの間ぼーっとしていると、

「あの一、ちょっといいかな」

不意に、鼻のつまった濁音混じりの声がして、視界が水色の布で遮られた。

顔を上げると、すぐ横に寺沢若菜が立っている。

「『六』の白衣って、吉野くんのだよな？」

一瞬『どく』って聞こえたけど、すぐに意味は理解した。

「えっと、たぶんそうだったと思うけど、なんで？」

若菜はオレの斜め後ろの席——つまり、晴香の後ろの席だけど、班は別だ。

ここ白波小では、給食当番の白衣は共用になっている。先週はオレたち三班が当番だったけど、今週は若菜たち四班が当番で、その白衣を着ている。

白衣には番号がふってあり、当番の週が終わるまでは、各々が責任を持って管理する決まりになっているのだが。

「あのね、ポケットからこんなものが出てきたんだけど」

と、差し出されたそれを見た瞬間、オレは凍りついた。

「これ、なあに、瓦か何かのカケラ？ 一応、大事なもののかなあと考えて。はい、返しておくね？」

若菜は、机の上に赤黒いそれを置くと、「もう一回、手を洗ってこなくっちゃ」と言いながら走っていった。



左のポケットにある異物感を、ハーフパンツの上から触って確かめる。また、ある。

給食を食べながらいろいろ考えた結果、こうやって五分おきくらいの間隔で確認することに決めた。

またいつ消えるかも分かんないし、どういうタイミングでそうなるのか、その瞬間をとらえてやろうと思ったからだ。

今朝、目が覚めると、どういうわけか枕元にあったあのガレキ。

オレは気味が悪くなり、それを新聞紙でぐるぐる巻きにして、部屋の勉強机の一番下の引き出しに放り込んで鍵を掛けてきた。

そう。確かに置いてきたはずなんだ。オレが言うんだから間違いない。それなのに……

「じゃあ次。寺沢さん、読んでください」

「はい」

椅子の引かれる音がして、若菜が続きを読みはじめた。

まだ少し、『まみむめも』や『なにぬねの』が入った言葉を読むのが辛そうな感じ。時々小さく咳もしてる。

若菜は先週の木曜日から昨日まで、風邪で学校を休んでいた。

だから当然、給食当番も今日からであり、六番の白衣に袖が通されるのも、自ずと今日が初めてということになる。

いや、この際、そんなことはどうでもいい。

一体どういうことなんだ。昨日のうちに教室に持ち込んでいた白衣袋の中に、今朝、確実に家に置いてきたはずのものが入っているなんて……

「はい、そこまで。ええと、この辺りは歴史の流れどおりに書いてあるので、通していきましよう。じゃあ次は、林原くん」

「はい」

さつきから、一定の音階を維持する棒読みサウンドが、妙な心地よさを演出してくれている。社会ってのは、どうも苦手だ。フランシスコザビエルとか徳川イェナントカとか、藤原のカタマリって何だよ。ああカマタリか。とにかくややこしい名前がたくさん出てくるし。

それだけでもウンザリなのに、その人たちが何年にどんなことをしたかなんて、何で覚えなくちゃいけないのか。そう思うといつも、頭の中の歯車が急激に減速しはじめ。

元々興味がない上に、五時間目という、魔物に『微睡の呪文』をかけられる時間帯ともなればなおさらのこと。

チラッチラツと辺りに目を配れば、普段は騒がしい連中もこぞって瞑想にふけっているよう。どうりで静かなわけだ。

横に目をやると、晴香もボーっとしてる。教科書に向かつてはいるけど、たぶん、別のことを考えてるな、この顔。

いつもなら、退屈になると、紙切れに『あーそーぼー？』とか書いてよこすのに。それで『あーとーでー』って返すと、『あそんでくれなきや、せんせーにゆってやるー』とか、わけ分からない手紙のやり取りをして結局遊んじやうんだけど。今日はそういう気分じゃないのかな。

そう言えば、珍しく給食を残したみたいだったけど、具合でも悪いのかな。

あの後、てつきり話の続きをせがまれるかと思っていたのに、結局あのまま流れちゃったし。

それどころじゃなかったってことなのかな。やっぱり何かあったのかな。気になるな、気になるな――

「――気になるか。そりや気になるよなあ」

あつ、その声はレキオレオナル……えっと。

「――レキオ・レオナルトウ。ドじやなくてトウだからな」

って、この声、一体どこから聞こえてくるんだ!? どうなってんだ、これ。

「――なに寝ぼけてやがる、自分でしまっておいて。それより、やい小僧。なんだってまた俺様を邪険に扱いやがるんだ、ええ、あんな狭っ苦しいところに押し込めやがって」

また。いきなり話しかけてきたかと思えば、何のことだよ。意味分かんない。

「――とぼけるんじゃないやねえ。文字だらけの包みんに閉じ込めて、置いてけぼり食らわしたろうが。お陰で騒々しくて気が狂いそうだったぜ。どういうつもりなんだ、あん？」

え……それってもしかして、このガレキのこと？

「なにを今さら。それに俺様に向かつてガレキとは何だ。言葉を慎みやがれ」

驚いたなあ、これがそうだったなんて!? キミは一体何者なの? っていうか、どうやって白衣のポケットになんか忍び込んだの?

「忍び込むだと、人聞きの悪い。安全な空間座標を選んで飛んできてやってただけだろうが」まさか、瞬間移動つてやつ?

「おめえが置いていくから仕方なくやったことだ。何か文句でもあんのか、あん?」

「おめえ、本当にそんなことできちゃうんだ。」

「そんなことあ俺様にとっちゃあ朝飯前よ。と言いたいところだが、こんな身だ、疲れるつたらありやしねえ。二度も余計な力を使わせるんじゃないやあねえよまったく。つくづく世話の焼けるガキだ」

「そうか、分かったぞ！」

「なんでえ、やぶから棒に」

UFOと関係あるでしょ。絶対そうだ。さては、宇宙から来た謎の生命体?

いや、待てよ。流暢に日本語なんかしゃべってるってことは、高い知能を持っている文明人による何かか。とすれば……

「いやい、何を一人でぶつくさ言つてやがる。俺様が何であるかってえのは、もうとつくに

言つたはずだろうが」

じゃあ、本当の正体は、遙か銀河系の彼方から地球人とコンタクトを取るために派遣された、ガレキ型偵察機・レキオレオナルトウ号! つてのはどう?

「喧嘩売つてんのか、小僧」

待てよ。まさか本当の目的は地球侵略とかじゃないよね? そのためにもオレを操ろうと企んでるんじゃないよね?

「さつきからくだらねえことばかり言つてんじゃないやねえよ。たとえそうだったとしても、ガキ一人操つたところで何ができる」

「げつ、否定しないところを見ると、リアルに侵略予定なの? いやだよ、やめてくれよ!」

「いいかげんにしやがれ。だいたい悪巧みしてるやつが、わざわざこうして助言なんてしに来るかってんだ」

助言つて、何に?

「だから言つたろうが、俺様は恋のキュービッドだつて。そのための助言以外に何がある。好きなんだらう、あの子のことが、あん?」

いや、それは、そうだけど……でも、別にオレは、そんなこと頼んだ覚えもないし、そういうんじゃないから。

「——おい小僧。勘違いするなよ。これはな、おめえのためじゃねえ、あの子のためなんだ」

どういうこと？

「——いちいち説明してる暇はねえ。とりあえず言うとおりにしろ。いいか、闘いの時は平手だ。拳は初めに相手を威嚇する時以外は使うな。あとは平手だけでやれ。いいな」

た、闘いつて何だよ。っていうか、それで助言のつもり？ さっぱりわけ分かんないじゃんか。——おめえがくだらねえことをグダグダくつちゃべつてるからだ。いいから黙って平手だけで闘えばいいんだ。平手だぞ平手。分かったな。平手だ、ぞ……」

あ、ちよっ、待ってよレキオ！

遠ざかる声を追って、オレは勢いよく立ち上がった。

「ちゃんと説明してくれなきゃ分かんないってば、もう！」

「ですから、次は五十四ページの下から四行目のところから読んでくださいと」

「だから、それがその闘いとどんな関係が……えっ？」

気が付けば、たくさんの視線と開いた口とが、こちらに向けられていた。先生もメガネの奥の目をパチクリさせている。

何となく状況を理解した途端、心臓が別の生き物のように激しく伸縮しはじめ、カーツと頭に血が上ってくるのが分かった。

ふと、晴香が小声で、「ここ。ここから」と、わざわざ教科書を指差しながら見せてくれている。

汗がどンドン噴き出してくるのを感じつつ、慌ててオレも自分の教科書を手にしたのだが、

「な、なんだこれ!？」

そのページの、あまりの異変に愕然としてしまった。

何と、文字の並びが明らかにおかしくなっているではないか。

「どうなってんだ、どうなってんだ」

度重なる不思議体験で完全にパニックしていると、妙に静まり返った教室に、晴香のやきもきたようなでっかいヒソヒソ声が響き渡った。

「遼哉くん、さ、か、さ、ま！」

その瞬間、どっとクラス中が沸き、オレは思いがけず皆の注目的になるといふ、願ってもない機会を得たのだった。

——誰も羨ましくは思わないだろうけど。

寝汗なのか冷や汗なのか、とにかく汗をかきまくった五時間目も終わり、

「それでは！ 帰りの会を始めるっす！」

今日聞いた中で一番やる気を感じさせる号令で、帰りの会が始まった。

「気が付いたこと！ ある人！ 一日の反省！ ある人！ いないので先生からッ！」

今日の日直は、泣く子も黙る谷口大那だ。

早く終わらせることだけを目的とした、手を挙げる際も与えない雪崩のような進行ぶりはずがだ。

先生もそれを予測していたかのように、「これは、帰ったら必ずお家の人に見せてください」と、すぐに用意していたプリントを配りはじめた。

日直は、隣の子と二人でやるのが普通だ。でも大那のように隣の席がない場合、もしくは隣の子が休んだりした時は、基本的には全部一人で仕事をこなさなきゃいけない。

だけど、授業開始と終わりの号令こそやるものの、その他の仕事をしている大那の姿をオレは見ている。

一時間目の後の黒板消しは内海がやっていたし、次の時間の黒板消しは塚田、三時間目の体育ではマット出しが木ノ内で、後片付けはまた塚田がやっていた。

そう。ちよつと偏りはあるものの、見事に大那グループの中で役割分担しているようなのだが、どんなシステムになっているんだろう。

そんなことを考えながらふと横を見ると、晴香のところでプリントが滞っているではないか。

「晴香ちゃん？」

若菜が不思議そうな顔をして肩を叩くと、横顔が、「あつ」と小さく驚いている。

「ああ、ごめん」

やつぱりおかしい。一体どうしたっていうんだ。

この学校に転校してきてから、オレはずっと晴香に助けられてきた。今のオレがあるのは、この子のお蔭だ。

だから、もしも悩んだり困ったりしてるんなら、力になりたい。せめて話ぐらい聞いてあげられるやつになりたい。

そうなんだ。別に付き合うとかラブラブになるとか、そんなんじゃないで。

「あのお、晴香」

思い立って小声で話しかけると、

「なあに、遼哉くん」

とっさに笑顔をつくって、いつもどおりを装ってる。

その顔で微笑まされると、どうも普段の自分のままでいられなくなるんだよな、最近。

「あのお、えつと、その」

変に意識しなければいいんだ。分かってる。一緒に帰らないか。さらつとそう言えばいいだけのことなんだから。

しかし、ひと呼吸おいたところで、

「きりーっ！」

大那の、やる気全開のひと際でかい声と共に、椅子たちのガチャガチャが間に割って入る。すると、帰りの挨拶を言い終わるか終わらないかのうちに、

「ごめん、今日はちよつと急ぐんだ。また明日ね！」

晴香は手を振りながら、今日「も」さっさと駆け出してしまった。

「って、おいおい、どういうことだよ。さっぱりダメダメじゃないか。左ポケットを触れば、『自称・恋のキューピッド様』がいるってのに。」

百パーセント信用したわけじゃないけど、もしかしたら、こういう時に何か効力を発揮してくれるんじゃないかと、密かに期待していたのにさ。

何だかフラれた気分になって、ため息をつきながら崩れるように席に座った。でもその時、ふと、レキオの言葉が頭をよぎった。

「——おい小僧。勘違いするなよ。これはな、おめえのためじゃねえ、あの子のためなんだ」

オレのためじゃなく、あいつのため……

「——いいか、闘いの時は平手だ。平手だけでやれ。いいな」

闘いの時って……

「ま、まさか！」

何ですぐに気付けなかったんだろう。

もしかしたらあれは、帰る途中であいつが誰かに襲われるってことを意味してるんじゃないのか。

その時に、オレがその変態と闘ってあいつを助けなきゃいけないってことなんじゃないのか。きつとそうに違いない。レキオはそれを言いたかったに違いない。

そう思ったら、迷いはなかった。もういても立つてもいらなかった。

急いで追いかければ、今ならまだ間に合うはずだ。オレはランドセルを引っ掴むと、飛ぶような勢いで席を立った。

いやな予感がしていた。

こんな真昼間から変質者が出没するとは思えないし、たとえそういう人に絡まれたとしても、

あいつなら上手くすり抜けられそうな気はするけど。

「ただ、今日のあいつは心配だ。オレがついてやらなくちゃ。オレが助けてやらなくちゃ。心の中で、「頼むから追いつくまで無事でいてくれ」とつぶやきながら、脇目も振らずドアに向かった。」

ところが、教室を出る一歩手前で、

「おい、吉野！」

ざわめきの中から、あんまり耳に心地よくない声に呼び止められた。

「ちよっといいか」

振り返ると、大那が手招きをしていて、その周りにはいつもの四人の顔があった。

「塚チンがさあ、お前に話があるってー」

皆ニヤニヤして、何かいやな感じだ。でも、この状況でシカトこいて逃げるわけにもいかない。まったく、よりによってこんな時に。

「話って、何だよ……」

さっさと用を済ませて晴香を追いかけたのに、そんな苛立つオレの心情を知ってか知らずか、塚田はいつもの変顔で、じらすようにゆっくりと歩み寄ってきた。

やがて机一個分くらい離れたところで立ち止まると、ヤツは得意の変顔で、ニヤツと不敵な笑みを浮かべ、これ見よがしに指の関節を鳴らしはじめたではないか。

「とと思ったら、いきなり真顔（言うまでもなく今日一番の変顔）になって、人差し指をフェンシングの剣のように突き出し、

「吉野！ ボクチャンと勝負だ！」

ビシッと指差しながら、そう言い放った。

反射的に身構えつつ、オレはすべてを悟った。

ケンカなんて、まともにやり合ったことは一度もない。おまけに完全なアウェイ状態とくれば、こちらが圧倒的に不利な交戦を強いられることは目に見えている。

でも、これが晴香を守るための闘いなら、しつぽを巻いて逃げ出すわけにはいかない。

どんな経緯があるのかは知らないけど、こいつがその相手なんだな、この変顔魔人と闘えっていうんだな、そうだろう、レキオ。

ポケットに問いかけながら、グツと奥歯を噛みしめると、身体中に力がみなぎってくるような気がした。

そうこうしているうちに、塚田が拳を高らかに振り上げ、



「いつくゾー！」と叫んだ。

いよいよ本格的に戦闘開始かと、オレも助言どおりまずは拳で威嚇しようかと思っただが、
どういふ戦法なのか、塚田はその手をもう片方の手と絡み合わせて捻り降ろすと、「見てるヨ、
今度こそ絶対勝ってやるからな」とか何とかブツブツ言いながら、片目でその隙間をのぞき込
ん……ちよつと待て。もしやそのポーズは――

「いいか、最初はグーだからな。男の一発勝負だゾー！」

って、やっぱりジャンケンかよ！

一氣に力が抜けるのと同時に、レキオが言う『拳と平手』の真意を今ようやく理解した。

「っていうか、何でオレとジャンケンなんか」

「あ、やっぱり最初はグッチッチでいこうかナー」

「どつちでもいいから早くやれよこのバカチンがあ！」

ギャラリイが囁き立てる中、塚田の「最初はグッチッチチーのモンチッチッ！」という意味不明
な掛け声で、白昼の決闘が始まった。

何が何だか分からぬまま、左手は無意識にポケットを握っていた。

助言どおり、「最初はグッチッチチー」で拳を出してからは、

「あいこツチッ！ チッ！ チッ！ チッ！ チッ！」

その後は塚田もオレも譲らず、平手での応戦が続いた。

オレには勝算があった。きつとこのまま、パーを出し続けていけば必ず勝てるはずだと。

何たってオレには恋のキューピッド様がついてるんだ。よく分かんないけど早くこの勝負に
勝って、晴香を助けないと。

パーでの攻防は信じられないほどの回数を数えた。その都度、次でチョキを出せば勝てそうな
気がした。それでも助言を信じて、オレはひたすらパーだけを出し続けた――



教室というものが、こんなにもただっ広く殺風景に感じられたのは初めてだ。

前の学校にいた時、放課後の教室がオレにとつて魅力的な空間だったのは、今にして思えば
一緒に遊ぶ仲間がいたからなのかもしれない。

誰もいない教室は、立ち上がった時の椅子の音も、上靴がきゅつと鳴く音も、一人分なのに
つもよりやけに大きく聞こえた。

職員室に行くと、岩清水先生は会議中で席にいなかったから、日誌は机の上に置いて、そのま
ま昇降口へと向かった。

それにしても、いやな予感つてのが、まさか自分の身にふりかかる形での中してしまふとは夢
にも思わなかったよ。

日が長いのが救いとは言え、すっかり遅くなつちまつたじゃないか。

「お前のせいだぞ」

ポケットに向かってブツブツ言つてはバシバシ叩き、静まり返った廊下をトボトボ歩く。

「つたく、あんなやつに負けるなんて」

オレは結局、塚田との『闘い』に敗れた。人生始まって以来の惜敗だった。

大那は、日直の仕事を遊びに変え、連中を巻き込んでジャンケン勝負を持ちかけていたようだ。そしてグループの中で一番弱い塚田が最終決戦に負け、ごねたことで特例が設けられたらしい。どうしても日直最後の仕事である学級日誌を書きたくないがために、外部の人間に擦りつけようと企てやがったわけだ。

何でオレに白羽の矢が立ったのかというと、「今日のお前、面白かったから」という、この上なく理不尽な理由だった。

しかもだ。塚田のやつ、「吉野になら勝てそうだと思つたんだよな」アイーン、なんて変な顔で嬉しそうに笑いやがって、ちきしょう。

悪いけど、オレはジャンケンは強いほうだ。前の学校のレクリエーションでやった全員ジャンケンの時だつて、最後の五人枠にまで生き残つて、ステージに上がったくらいなんだから。

今回だつて、自分の意思で勝負したら絶対に勝てたはずなのにさ。

それ以前に、こいつが授業中に話しかけてさえこなければ恥をかかずにすんだし、大那たちの

ターゲットにだつてならなかつたんだ。

思えば最初の出会いからしてロクなもんじゃなかつた。

何が恋のキューピッドだ。結局晴香とは何の関係もない上に、こんなひどい目にばつかり遭わせやがって。まるで疫病神じゃないか。信じたオレがバカだった。

「何とか言つてみる、このガレキオ、詐欺師、ペテン師、このツ、このツ」

思い出すと悔しくて悔しくて、握り潰す勢いで左ポケットのそれをギリギリと締め付けてやった。

それでも、うんともすんとも言いやしない。

シカトかよ。もういいかげん頭にきたぞ。

「そつちがその気なら、こつちにも考えがあるからな」

校門を抜けるとオレは真つ直ぐ、学校の傍にある公園へと向かつた。

海岸と隣接したその公園は、今からちょうど三十年前、市町村合併にともなつて造られた記念公園らしく、【サンカレドニア公園】という洒落っぽい名前がついている。

その昔、測量のために航海していたナントカいう外国の人が入港した際に、ここ白波海岸の美しさに感銘を受け、【サンカレドニア】と命名したのがその由来だとか何とか、確かそんなことが案内板には書かれていた。

名前のとおり洋風な雰囲気か漂う広い敷地には、入つてすぐのところにもちよつと風変わりな円

錐状の塔が建っている。

その、大小さまざまな岩で積み上げられた石造りの建物は、ところどころにいろんな色や形のタイルがはめ込まれており、何か芸術作品のような趣さえ感じさせる面構えだ。

一階はトイレになってるんだけど、その脇から螺旋状のスロープが上まで続く構造をしていて、てっぺんは展望台になっている。

ここに引越してきた日、車を降りて一番最初に目に付いたのがその塔で、オレも一度だけそこまで上ったことがあった。

でも、今日は展望台には用はない。

目的は、その『でっかいオブジェ』のゴツゴツした壁そのものだ。

「さあ、今度こそ覚悟しろよな」

ポケットから、筆取りするように赤黒いカケラを掴み出すと、

「うりゃー！」

オレは思いっきり壁に向かって投げつけてやった。

すると、

「あつ」

レキオはそのまま激しくぶち当たり、弾け飛んでしまった。

内心、ちよつと焦った。まさかこんなにも無抵抗で直撃するとは思ってもみなかったんだ。

しかし次の瞬間、まるで見えないバットにでも弾き返されたみたいに急激な方向転換を見せると、手すりを乗り越え、大きく弾みながらスロープを上っていくではないか。

「つたく、どこ行くんだよ、このガレキめ」

少しホツとしながらも、しづしづ後を追って、結局塔のてっぺんまで上り詰めるに至ったのだが。

レキオは柵の袂まで勢いよく転がっていき、ようやく動かなくなったかと思ったたら、間もなく煙のように消えてしまった。

「なんなんだよ一体」

どうせ消えるのなら、最初からそうしてくれりゃよかったのに。

上りたくもない展望台にまんまと上らされるなんて、またしても嵌められちゃった気分だ。

「あゝあ。何やってんだろ、オレ」

ため息をつきながら柵の上に手をかけると、吹き抜ける一陣の海風が、やさしく髪をかき上げてくれた。

心地よさに思わず目を閉じてみれば、松林が奏でる涼しげな音色と微かな潮騒が耳をくすぐってゆく。

そう言えば最初にここへ上った時はまだ風が冷たくて、この海辺のさざめきさえも、寂れた虚しい音にしか聞こえなかった。

確かあの松林の一角には一本だけポツンと桜の木があつて、そのピンク色が何か仲間はずれみたく浮いてて、哀れに見えたっけ。

あの時は、とにかく見るもの聞くものすべてに、不安をかき立てられていた気がする……
そう考えると、今はそれなりに幸せだと言えるかもしれない。

見知らぬ町に引越して来て、新しい環境に放り込まれて。そんな、慌ただしく流れゆく季節の中で、あいつというトキメキに出逢えたこと。

それだけで十分じゃないか。

「第一、オレたちまだ小学生だもんな」

少しずつ色濃くなってゆく海辺の光景と、どこまでも伸びていきそうな塔の長い影を眺めながら、オレは妙に穏やかな気持ちのまま、くるりと踵を返した――

が、振り返った瞬間

「！」

心臓が止まるかと思った。

塔の中央にせり上がる、巨大なパラボラアンテナを載せたコンクリート台。その向こう側の角に、赤いものが見え隠れしている。

誰かがいる。

恐る恐る回り込んでいくとそこには、ランドセルを背負ったまま膝に顔を埋め、縮こまって座

り込んでいる女の子らしき姿があつた。

地面につきそうな長い髪が、シルクのカーテンのようにひらひらと風に揺れている。

細い脚が伸びるデニムのショートパンツ。膝上辺りから始まる青と白のマリンボーダー。確か

今日この組み合わせだったのは――

視界が揺れるほどに激しく音を立てる胸を制しながらさらに近付き、オレはついに確信した。

膝を抱えている手に握りしめられた、薄ピンクっぽいボディ。そこからぶら下がっている、

青っぽいビーズ飾りと銀の鈴のストラップ。

それはどう見ても、あいつがいつも大事そうに持っているケータイ、そのものだった。